

---

play

黒里 漆

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

play

### 【Nコード】

N5401BA

### 【作者名】

黒里 漆

### 【あらすじ】

裏世界。

善も悪も、大人も子供も、男も女も、権力も財力も、地位すらも交差し入り乱れ、意味を持つことはない、そんな世界で。

1人の少年と少女が出会った。

出会っはすのなかつた2人。

出会ってはいけなかつた2人。

そんな2人が出会い、物語は狂い、歪み、動き出す

裏世界。

ここには、とある噂があつた。有名な、何でも屋がいるらしい。けれど、名前も容姿も性別も、年齢さえ分らない。

ある者は女と。ある者は男と。ある者は年寄りだと。ある者は子供だと言つた。

その何でも屋に依頼するには、不定期に変わる隠れ家に、大金を持つていかなければならないという…。

\*

「えつと…この角を、右に曲がつて…」

夜。街灯もない路地を、1つの人影が歩いてた。その影は少女と呼ぶには些が大きく、女性と呼ぶには些か幼かった。その人物はそこそこ身なりがよく、薄暗い路地には不似合いだった。しばらくメモらしき紙とあたりを交互に見、何かを探していた。

「…あ、あつた！」

その人物は、お目当ての建物を見つけると、入って行つた。

「あれ…？誰も居ない…？」

建物の中に入り、あたりを見渡す。中は外観からは想像もつかないほど、綺麗だった。しかしそこには誰もおらず、がらんとしていた。「今日はお休みなのかなあ？頑張つて来たのに…。」

本当に苦勞して来たから、最悪だ。私の苦勞を返せと言いたい。しかし、言う相手は今はいない訳だし、八つ当たりをする相手もないので、仕方なく帰ろうとしたとき。

「依頼ですかあ？」

やけに間延びした声が、その場に響いた。いきなりのことに、固まってしまう。相手は顔は見えないが、こちらの返事を待っているようだ。しかし。完全に答えるタイミングを失ってしまった（ような気がする）。…沈黙が痛い。どうしよう。答えるべきなんだけど…。それは分かっているんだけど…。と、私が勝手にいろいろ悩んでいると、また、間延びした声が聞こえた。

「…あれ…？違いましたあ…？でしたらすみませんでし…」

「違うんです依頼ですっ！！」

私には、大げさかもしれないがその声が天の声に聞こえた。だから、声を遮つてまで返事を返し、返しながら勢いよく声のした方へ振り向いた。すると、声の主と思いき少女が目丸くしながら立っていた。私は、予想外の人物にまた固まってしまった。少女は、金色の猫っ毛に群青のくりくりな猫目、真っ白な肌と言う容姿で、何でも屋をしているとは思えない。いや、服はそれっぽいくど…。（黒いシャツに黒いジャケット、黒いズボンに黒いブーツと黒ずくし。）こんなかわいい子が、何でも屋…。もしかして、助手とか？あり得るかも。少女をほつたらかして考え始めた私にしびれを切らしたのか、少女がいらいらした声で話しかけてきた。

「依頼なら、ついて来てくださーい。」

早く来ないとおいて行きますよお。

その声で我に返ると、急いで少女の後をついて行つた。少女は部屋の隅へ行くと、壁を触りだした。何をしているのだろう。階段なら向こうにあるのに…。意味が分からず少女を見つめていると、少女は目線だけをこちらに向け、説明してくれた。

「あつちの階段はダミーです。屋上まで一直線で行けるですね。」

言いながらも、手は休ませない。すると、あるところで壁がへこんだ。と思うと、近くに置いてあつた棚が動き出し、上へ続く階段が現れた。

「わあ…。すごい…。」

ベタだけど、本物を見るとやっぱり驚く。思わず声を上げると、少女にばかにしたような目で見られた。これには少し傷ついた。いいじゃんか、少しくらい。初めて見たんだよう、隠し扉とか。少しいじけてみたけど、扉が閉まりそうになつたのであわてて中に入った。中は灯りがついていて、意外と明るかった。少女は私にお構いなく階段を上っていく。おいて行かれるのは嫌なので、付いて行く。でも、少女の足が速い。平坦な道だつたらなんてことない速さだけど、階段だから辛い。すぐに息が荒くなる。と、突然少女が立ちどまり、振り向いた。あんまりにも突然だつたものだから、階段から落ちそうになる。でも、何とか持ちこたえ、少女を見る。

「カルテット。」

「…は？」

どうしたのかと見つめていると、少女はいきなり変なことを言い出した。訳が分からず、変な声が出てしまったのはしょうがないと思う。カルテットは確か、イタリア語で四重奏とかいう意味だったと思うけど…。それが何か関係あるのだろうか。固まっていると、少女が溜息を吐いた。

「僕の名前。それくらい分かってほしーです。」

カルテット。それが、この子の名前…。変わってる。いきなり言われても、分からないくらいには。と、言うか…この子が名乗つたの

だから、私も名乗るべきなのだろうか。そう思い、口を開こうとしたとき。

「長いですしー、言いずらかったらてきとーに略してです。」

「あ、分かりました。」

じゃなくて！危うく自己紹介を忘れるところだった。気を取り直し、口を開く。とたんに、カルティ（そう呼ぶことにした）が振り向き、体を横にずらす。何があったのかよく分からないけど、よけたってことは通れってことだね。と、勝手に解釈し、行ってみる。すると、そこには踊り場があり、更にその奥には扉があった。扉の前まで行くと、そこには飾り文字で何かが書いてあった。

クロッシュ  
cloche

フランス語で、貴婦人用の帽子だったり、釣鐘だったりする。（ここでは後者の意味だろう。）  
そして。

裏世界一有名な、何でも屋の名前。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5401ba/>

---

play

2012年1月14日21時49分発行